「みちのく経済文化研究会」は有志からなる民間団体である。

会長の山本均氏は今から約30年前、岩手県浄法寺町（現 岩手県二戸市浄法寺町）の町長として、名刹（めいさつ）・天台寺の復興と地域活性化を結びつけた先進的な取り組みを進めた。

同研究会の活動の根本の考え方には、伝統文化の掘り起こしと新しい地域文化、産業との融合がある。

PROFILE

みちのく経済文化研究会
会長 **山本　均**

お問い合わせ
事務局：㈱丸丙 事務所内
〒989-3124
仙台市青葉区上愛子字蛇台原61番地の4
TEL 022-391-8030　FAX 022-391-6606

やまもと・ひとし

1949年2月5日生まれ
1971年3月　専修大学文学部 卒業
1986年1月　第15代岩手県浄法寺町 町長に就任
2010年7月　日中企業経済交流会（現在､みちのく経済文化研究会）会長 就任
2011年4月　秋田県海外展開アドバイザー
2018年8月　宮城県日中友好協会 理事 就任

文化と産業は地域活性化の両輪
～みちのく経済文化研究会～

企業誘致よりも人間誘致

岩手県二戸郡・旧 浄法寺町（2006年1月の市町村合併により現在は岩手県二戸市浄法寺町）は、国産漆の約7割を産し、浄法寺漆として知られる高い品質を誇る漆の生産量日本一の町である。いささか旧聞に属するが、1986年1月、私は同町の町長に就いた。当時の人口が約5,000人ほどの町である。

私が町長に就任して、町の活性化をさまざま考える中で、最も重要なことは人材の育成であると思った。とかく町づくりというと、企業誘致があげられる。当時の一般的な風潮も産業活性化のためには企業誘致を、というものであったように思う。私はそれよりも人材の育成が先決と思い「人間誘致」を考えた。人間誘致により、町民の意識・考え方を変えなければ、企業も来ないし、地域も良くならない。そこで、遠くと交わり近くを攻める“遠交近攻の策（えんこうきんこうのさく）”をとった。

瀬戸内寂聴さんと筆者（写真提供：筆者）

同町に天台寺という天台宗の名刹がある。私か町長の当時、残念ながら天台寺は荒廃していた。まず、浄法寺町の眠れる財産、天台寺に高名な瀬戸内寂聴先生（以下、寂聴さん）に住職として来ていただくことを考えた。

そして、寺の復興と人づくりによって地域おこしを進めた。それにより、町民の意識改革はもとより、観光開発や、ひいては地場産業の発展にもつながると確信した。

1976年に天台寺の特命住職に就かれ、寺の復興に尽力された作家の故 今東光先生のご縁もあり、紆余曲折を経て1987年、寂聴さんが住職に就かれた。その後、天台寺はめざましい再興を遂げ、寂聴さんの法話の時には何千人もの人々が訪れるようになった。

地域の伝統文化に新たな芽吹きを

地域の活性化には文化と産業の二つが必要であると考えている。地域の文化にはお祭りでも地域の行事でも伝承のために後継者が不可欠である。それはその地域の人でしか継承できない。子どもの時分からの修練が必要であるからである。

例えば、岩手県北上市周辺に伝わる伝統芸能・国の重要無形文化財「鬼剣舞（おにけんばい）」は学校の運動会で披露される。地元の子どもたちが就職や進学でふるさとを離れても、その行った地域で「鬼剣舞」のグループを作っている。毎年8月には北上市で「北上・みちのく芸能まつり」が開催され、みちのくの郷土芸能を担う人々が全国から集まる。ふるさとの伝化を忘れない、これが文化継承にとって重要であり、ひいては地域の経済を支える根本になると思う。

企業活動も単にお金を稼ぐ経済活動ばかりではなく、企業文化を持たなければならないと考えている。こうした思いの下、「みちのく経済文化研究会」は活動している。

研究会は、現在、法個人合わせて約50の企業･団体･個人の会員数である。今まで祖先から継承した地域の文化を掘り起こしながら、経済活動を絡めて将来をどのように展望するか、これがみちのく・東北の課題である。もう、大都市圏と比較しても仕方がない。自分たちの固有の文化をグローバルに展開する方向を考える、この方が早い。地域の固有性、この根っこの部分を持たない流行ばかりを追い求める限界は既に来ている。その面で、みちのく・東北は手付かずの資源の宝庫であろう。

とは言え、人が集まらなければこうした考えも広まらない。そのため、寂聴さんの秘書・瀬尾まなほさんをお呼びして地域の方々と交流し、地域の方々の考えを掘り起こし発信する取り組みを行っている。新しい種をまき新しい水と肥料をほどこすのである。これが私たち研究会の役割であろうと思う。時間はかかるが、まずは人づくりである。当研究会には多種多様、東北のさまざまな地域の企業、人に参加いただいている。地域には文化と産業の両輪が必要で､その両方を「人」によって結んでいく、これが目的である。

古い文化に固執しろと言うのとは異なる。伝統的文化だけでは、新しい人が入りづらくなる。伝統の上に新しい文化を加えていくことが求められている。温故知新ということであろう。

＊

浄法寺から地方を元気にしよう!これが寂聴さんと私が練った構想の根本であった。そのため、町長当時、女性芸術家だけの芸術村を創ることも考えた。また、天台寺に上がる参道沿いでは現在の「産直施設」の草分けと言えるであろうか、地元の農家のお嫁さんたちが作った野菜、そば、団子などを販売することとした。

人が多く集まりだすとバス会社の方とか、さまざまな人々が仲間に入ってくれて、たくさんのアイデアがあふれた。

地域の文化と産業は活性化の両輪との思いを確信し、今日に至っている。